

読谷村における沖縄戦

沖縄戦や戦後の復興の様子を紹介するコーナーで、飛行場建設や米軍上陸、地上戦に関する写真、ヘルメット、軍隊手帖、軍服、奉公袋、千人針等を展示している。特別展示室となっているので、企画展示がある場合には随時展示の変更がある。



沖縄の楽器

沖縄に古くからあった楽器といえば鼓とブラで、祭祀行事などでは中心的役割を果たし庶民生活に溶け込んでいる。14世紀後半頃から中国・大和を中心に海外から三線、箏、胡弓、鉦、ドラなどが移入され沖縄独特の音楽土壌が育まれてきた。読谷村は歌と三線の始祖「アカインコ」生誕の地であり「三線」を中心に沖縄の楽器を展示してある。



喜名焼

那覇市銘苅から「一前略一康熙九年庚戌七月初三日、右読谷山ニテ焼申候」と刻字された厨子甕が見つかった。この厨子甕は1670年（康熙九年）に焼かれており、喜名焼と考えられている。したがって壺屋統合（1682年）以前にすでに読谷山には荒焼を焼く窯があった。

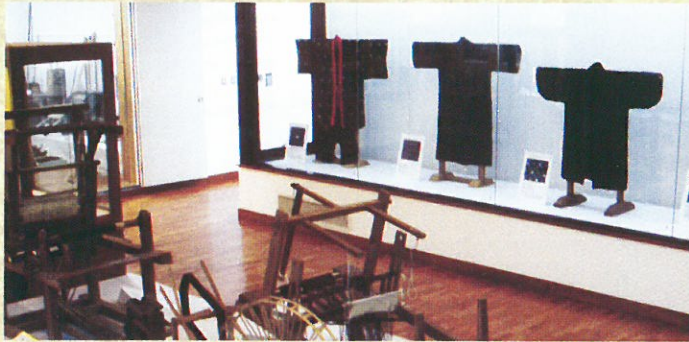
本教育委員会では、1992年と2003年に喜名古窯跡の発掘調査を行い、三つの窯と物原そして多くの出土品を掘り出し、調査成果を展示してある。



読谷の衣

読谷村には、15世紀初期、南方から技法が伝来したといわれる読谷山花織が伝承されており着物、棒術のときなどに着るウッチャキ、組踊に用いるループク、ティーサージ（手巾）などがある。

日常着に用いる衣服は、明治期から大正期までの衣は織りから仕立てに至るまで、ほとんど自給自足であった。夏衣のバサージン（芭蕉衣）の原料である糸芭蕉は各屋敷に植えて、繊維をとり地機や高機で織った。その中には芭蕉衣を藍で染め上げたクルジナーなどがある。ムミンジン（木綿衣）は糸や反物を購入して各家で仕立てたり、製品として購入し着ていた。



農具・大工道具

畑作耕耘農具として、イーザイ、スキ、ターウチャグエー、ハーグエー、ミマターグエー、タマターグエー、除草及びカズラ植え付け用具のヒーラがある。水田用農具にはクルバシ、ヤチパスルイタ、ターグサトウヤー（田草取やー）、カナバ（シンバ）等がある。その他カズラや山羊の草、農作物などを運ぶオーダーとその編み機がある。

大工道具として各種のノコやティーン、カンナ等を展示している。あわせて、これらの道具をつくる鍛冶道具も展示してある。



読谷の遺跡

読谷村の先史時代の遺跡は豊富で、現在までに65箇所（平成20年3月現在）が確認されている。その中で渡具知東原遺跡は爪形文土器が出土する縄文時代早期（7000年前）のもっとも古い遺跡で、しかも九州に由来する曾畑式土器も出土した。また、木綿原遺跡は箱式石棺墓を伴い、国の史跡に指定されている。

資料館北側の松林奥には2000年12月2日に世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つとして登録された国指定史跡座喜味城跡があり、15世紀初期の山城を偲ぶことが出来る。考古展示部門ではこれらの遺跡から出土した資料が時代別・遺跡別に見ることが出来る。

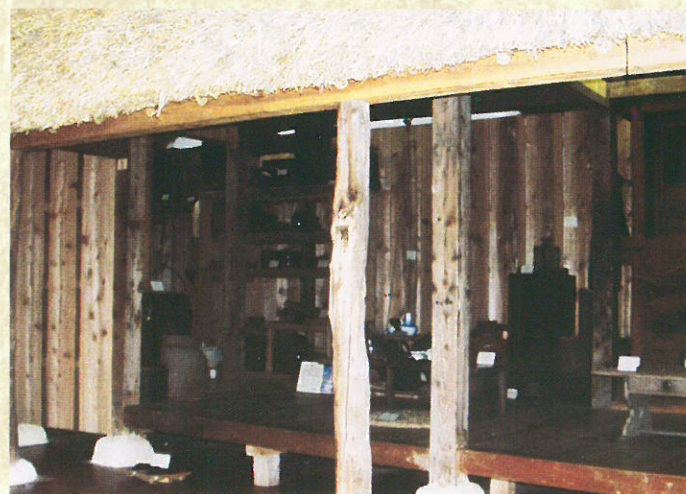


民家

戦前の読谷村における民家は茅葺きと赤瓦葺きで、昭和19年の茅葺きが1,845戸、赤瓦葺きが1,282戸であった。これらの家も今次大戦でほとんどが焼失し、戦後茅葺きやセメント瓦・赤瓦葺きが復興されたが、昭和30年頃からコンクリート建てが流行した。

民家の間取りは家によって多少の相違はあるが、基本的には1番座、2番座、裏座、台所等からなっていた。たいてい1番座に仏壇と床間があり、台所に近い裏座にはジール（地炉）が設けられていた。

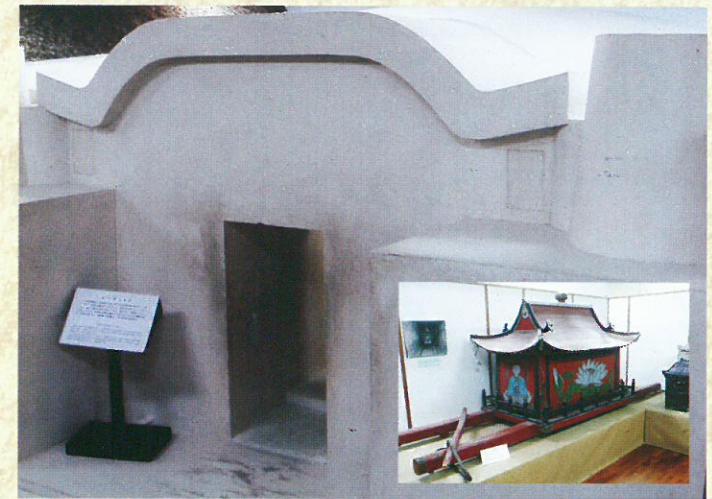
戦前の生活用品とともに民家を復元した展示である。



亀甲墓と葬具

沖縄の亀甲墓は華南系墓式の影響を受けており、もっとも古いのは那覇市にある伊江御殿の墓（1687年築造）で、地方で流行し出したのは明治中期から大正期にかけてである。亀甲墓は俗に母胎をかたどったものであるといい、人は死ぬと再び母胎へ戻っていくという考え方が伺い知れる。展示してある墓は読谷村大湾にあった古い亀甲墓を参考にして造ったもので、墓堂の構造はシルヒラシと一段のタナからなっている。

ガン（龕）は遺体を墓まで運ぶもので、現在では霊柩車にかわっている。厨子甕は洗骨後の骨を納めるもので、家型の石厨子や、陶器製の家型厨子、甕型厨子等がある。



漁具

漁船として利用されてきた伝統的なサバニを初め、漁船の付属具のエーク、ユートウイ、イカリ、またタマウーキ、ウミバク、チジュル、イジュン、ミーカガン、アマラ、ウミフージョ、網などの漁具を展示してある。

